

共同体)は、教団やアカデミズム、ジャーナリズム、文壇などといった個別の解釈共同体(スタンレイ・フィッシュ)間の対話を可能にすると同時に、対話を通じて各解釈共同体内の差異、多様性を可視化するような場として機能しうるだろう。

立場を異にした者どうしが、(読みの共同体)において互いの表象を突き合わせようとする協働表象は、各々の単独の立場からは到達しえない宗教文化の領域を生じさせるかもしれない。そもそも信仰的遺産は、原理上さまざまな解釈に対して開かれていくものであり、ある特定の作法に基づいた解釈は他の解釈の可能性をなほどこ排除・抑圧することによって成り立つほかはない。だが、異なる立場の者どうしが接触・交渉することで、それまで自明視してきた排除や抑圧の正統性、ひいては自己の立場の存立基盤が根底的に問われることになる。そのように自己の立場を揺るがしかねない他者の表象を(読みの共同体)への呼びかけとして真摯に引き受け、違和感を抱えつつ、自らの立場から応答しようとするプロセスのなかに、協働表象の意義が現れてくるだろう。ここでは、部分的な合意形成によって、信仰や研究実践のあり方などに変容がもたらされることも考えられる。

しかし、異なった立場からの表象の出会い、一方的な教導の行為へと転化したり、感情的な反発に終始してしまったりすることも往々にしてある。目的・関心・信念を共有しない他者の声に耳を傾けることは、信仰的遺産の安定した表象を妨げるため、他者を自己の立場へと強引に同一化させようとするか、呼びかけに対する応答を拒絶することで自己同一性を守ろうと

するのである。

こうした対話の失敗という契機は、協働表象の困難さを示すものではあるが、その不可能性を意味するものとはいえない。というのも、協働表象はひとつの時間・空間に閉じられた実践ではなく、論理的には(読みの共同体)に参入しようとする者すべてに開かれた企てと考えられるからである。たとえば特定の討議の場においてはたんなるディスコミュニケーション、対話の失敗としてしか生起しなかった事態が、その討議の記録を事後のもしくは遡及的に検証し直そうとする分析者によって、新たな宗教文化の可能性として立ち現れることもある。そこにおいては、協働表象の現場における越えがたい差異の経験、戸惑いの経験、教導の暴力の経験といった否定的な契機が、新たな信仰の領域、新たな研究の視座を切り開いていく。その意味で、協働表象はつねに未完のプロジェクトとして有り続けるものだといえる。

自然悪概念の宗教哲学的再解釈は可能か？

佐藤 啓介

なぜ、この世界に自然災害が起こり、人々の生活や身体を襲うのか。こうした災害をめぐる「なぜ」の問いは、ユダヤ教やキリスト教においては、それが自然悪として捉えられ、神義論の名のもとで問われてきた。しかし、現代においては、地震や津波などの自然現象の起こるメカニズムとして、悪の原因は、自然科学的に徹底的に説明されている。そして、もはや、自然悪の存在理由を問うという姿勢そのものが、無意味な営為とし

て無効となつてゐる。その意味で、そしてさらには、世俗社会における参照可能な共通の超越軸の不在のなかで、自然悪カテゴリーそのものが、有効なものではなくなつてゐる。

にもかかわらず、私たちは、災禍に対して「受けいれがたい」という感情をもつことがある。自然悪の問題を自然の創造主としての神から切り離すならば、悪の責任を帰すべき相手はおらず、被害の大きさの責任のみを人間に帰し、ひたすらに、自然に対する謙虚さの美德が説かれることになる。しかし、本来に、自然の災禍に対する私たちの感情は、それに尽きるだろうか。狭義の神義論には収まらないかたちで、広義の神義論には、いわば「宛て先のない抗議」の声が伏在している。

バーガーは、「神義論が第一義的にもたらすものは、幸福ではなく、意味である」と規定し、神義論が、当該社会で構築された秩序原理をもつて、意味そのものを回復することを目指すものだと考えた。しかし、世俗社会を生きていると考える人々にとつて、人間を超え出る契機を参照することができないため、災禍という悪の意味付与は困難となる。

他方、アンリによれば、受苦は、生にとつて、外因的・偶発的な出来事の結果として到来するものではない。生が生であるかぎり、受苦がある。生とは、自らを「感じる」限りにおいて、自身を被るものだということになる。アンリは、生を生たらしめるその生の自己触発のうちに、根源的に自己を被る働き、つまり受苦する働きがあると考える。こうしたアンリの議論は、神義論のうちにある「悪の外的な意味」と「受苦の内的な意味」という二つの要求を適切に区別することで、従来の神

義論を補つたと評価できるが、外界からの触発によつて生じる個別的な受苦の問題を明らかにしきれていない。

ネグリは、ヨブにおいて、応報的正義では説明のつかない苦しみに「意味」を与えようとするあらゆる試みへの抵抗を見る。そして、その意味付与に対する抵抗のなかで発見されるのが、存在の徹底した偶発性であり、この偶発性に内在する力の「脱尺度の尺度」であるとネグリは考えた。通常の理性、意味から逸脱し、それを徹底的に無効化する存在の偶発性の発見は同時に、世界を縛る尺度、理性、さらには自己、神、世界、それらがいずれも偶発的なものであり、なお生成の途上にあることを知らせるものでもある。悪による苦しみのうちにある人は、苦しみの徹底的な「尺度のなさ」を発見することで、既存の秩序の底にある偶発性を跳躍板に、苦しみの究極的な従属性のただなかで「秩序の創造」をなす主体へと生成し、新しい尺度を打ち立てる革新をなしうるとネグリは考えた。

であるとすれば、昇華しきれない私たちの悪に対する抗議とは、悪への通常の尺度による意味の要求とは異なる、異なる尺度、そして異なる尺度がある世界を求める声である。悪が無意味であるがゆえにこそ、「他なる」脱尺度によつて自己も世界も新たに構成しつづけることを可能にする力への希求こそが、広義の神義論が、自己触発する生が感受する個別的な苦しみのうめきのなかであげる声である。伝統的な宗教概念を参照することが容易ではない世俗社会においてもなお、その声は、現在の苦を克服する力ではなく、生が「感じる」力を維持しながら、現在という構成そのものを革新する力に向けられている。